
(小説版) 交響詩篇エウレカセブン その後

城山達志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（小説版）交響詩篇エウレカセブン その後

【Nコード】

N7222G

【作者名】

城山達志

【あらすじ】

小説版交響詩篇エウレカセブンのその後のレントンとエウレカを描いたもの。

草原で

「お帰り」

さあ、と風が吹いた。

陽の匂いが、草地や風に含まれた湿気をもやんわりと溶かし、レントンの鼻腔にさわやかな香りを運ぶ。

レントンはしばらくそのまま動かなかった。

近づこうとすれば、必ずかき消すように霧散してしまう、いつもの夢なら。

せめて、不粹な目覚めに邪魔されるまでの間、この光景を見つめていたかった。

その光景を見つめたまま、レントンはやっとのことでもう一声絞りだした。

「意外と早かったね」

彼は微笑んでいた。やや皮肉っぽく。

そう、泣いてなんかやらない。

さんざん無様に泣かされた挙句、いつ帰るのかも告げず、メーテルまで俺に押し付けて行っちゃうんだから。

繊細な時間が、草地を吹く風に織り込まれ、静かに流れ去っていく。

（いつもの夢ならそろそろ消えるころだな）

しかし、目の前の光景は変わることなくたたずんでいた。レントンの表情が一気にこわばった。

（まさか！そんな、現実！？）

「エウレカ！」

レントンは初めてその名前を音にのせた。

「ただいま、レントン」

その名をもつ少女は、あの澄んだ声で、静かに、確かにレントンの鼓膜を震わせた。

レントンの頬を一粒つたう、そして、また一粒、草原に碎けて散った。

彼はぐいっと袖で目元を拭うと立ち上がった。
歩み寄る。エウレカの元へ。

一步。初めてエウレカと出会った時のこと、日差しに映える、空の色のような髪。

また一步。初めてエウレカの涙をみたときのこと、濡れていてもどこまでも澄み渡っているスミレ色の瞳。

さらに一步。初めてエウレカとケンカしたときのこと、ぴたりと口を閉ざし、感情の色に燃える強い意志の目。

もう一步。初めてエウレカとリフをしたときのこと、彼女の背中を抱いて聞いた香り、干したてのシャツ。

あと一步。初めてエウレカと誓いあったときのこと、レントンの腕のなか霞んでいく虹の輝き、彼女の最後の笑み。

一つ一つの思い出が、感覚が、呼び覚まされ、旋律をなす。

レントンはその旋律を追いか求め、ついに手に取り、愛おしく抱き寄せた。

かたときも忘れたことはなかった、忘れることなどできなかった。何度となく失望を味わった。その中であってさえも約束を信じ続けた。

「レントン」

スミレ色の瞳は涙に潤んでいた。

「エウレカ」

彼女の耳元でもう一度静かにその名をささやく。

二つの影が一つに重なった。もう離れることは無い。

干したてのシーツの香りに包まれ、レントンは幸せだった。

帰り道にて

レントンはエウレカの手を取り、ランド・カーに向かって、草地の丘を降りる。

戻るのだ、帰るべき場所へ。

彼女をサイドシートへ座らせる。

「どうぞ」

「ありがとう」

お互い、そう言葉を交わしただけで、あとはしばらく何も話さなかった。

レントンにはエウレカに話したいことが山ほどあった。

自分のこと、メーテルのこと、ホランドたちのこと、その他にもいろいろ。

しかし、用意されていたはずの言葉は一瞬にして一万光年ほどの彼方に吹っ飛んでしまった。

言葉が意味をなさない、それでいて、心地よい沈黙が流れた。

車窓には、陽射しに映え、鮮やかな緑に彩られた風景が、こ気味良いエンジン音とともに流れてゆく。

半分ほど開けられたウィンドから陽が溶かした草地の湿気の香りが滑り込んでくる。

ベルフォレストの自然の放つ影と香りを背景にして、眩しさにやや瞳を凝らしてランド・カー運転するレントンの横顔。

少年時代には見られなかった精悍さが漂っている。

レントンはサイドシートからの視線を感じてハツとなった。

「・・・な、何？」

彼はチラッと横目でその視線をとらえた。

「背、伸びたんだね」

母親のような慈愛にみちた声だった。

「・・・そりゃ、いつまでも十四のままではいられないからね。経験が俺の身長と思慮を成長させたのさ」

自分でも少しキザかなと思うほどのセリフだった。

「フフツ、ホランドみたいなこと言って」

エウレカはいたずらっぽく微笑む。

「なんで、ホランドなんだよ」

「フフツ、知らない」

「なんだよ。それ」

二人は笑った。笑い声がごろごろと風に舞う。

楽しかった。こうして他愛も無いことを話せるのがうれしくてしようがなかった。

そう、ゲッコーステートのころのように。

あの時以来、止まっていた二人の時計は、今、確実に時を刻みはじめた。

あとは波に身をまかせた。

レントンは堰を切ったように、話しはじめた。

「背が伸びたのは俺だけじゃない、メートルは大きくなったよ、生

意気な口まで聞くようになったんだ」

「ほんと？会いたい」

「ああ、すぐに会えるよ。それから、ホランドとタルホさんに子供ができたんだ。信じられる？あのホランドがおやじさんだなんて」

「信じられない！じゃあ、タルホはお母さん？」

「ああ、そうだよ。あのグラビアアイドルが？きついよねー。アタシもうバカやんないしーとか言ってるのかな？」

「タルホに聞かれたら、レントン、ゼツタイにグーで殴られると思う」

「アハハッ、それから・・・」

「フフツ・・・」

二人は止まっていた時間を埋め尽くそうとするかのように語り合った。

そして、笑い合った。

エウレカの帰郷

「まったく、あのバカときたらどこをほつつき歩いとるのやら」
アクセルは孫の不在を罵りつつ、思わぬ来訪客を見送った。

この辺境のベルフォレストをわざわざ訪ねてくれた礼儀正しい青年、名をドミニクといった。

そして、彼の若い夫人、アネモネ。

「レントン君に宜しくお伝えください」

青年は去り際にそう言い残して言った。

「帰っちゃったの？お客さん」

風変わりな来訪客に興味をそそられて、そばで見ていたメーテルが言った。

「ああ、近頃の若者にしては立派な青年だ。レントンにも見習わせたいもんじゃな」

「ふーん」

工場敷地の入り口に並んで立つ老人とひ孫の頬をやさしい風が撫でる。

「いい風じゃな」

「風？」

仕事に戻ろうとしたアクセルだったが、

今しがた、ワゴン車が去ったのと反対方向から入れ違いに近づいてくるエンジン音に気がついた。

その車が工場所所有のものであると認めたアクセルは、

その運転者に小言のひとつでも言ってやろうと車を出迎えた。

車から降りてきたレントンを大声で叱り付ける。

「どこへ行つとった！部品はどうなったんじゃ？それから、せつかくお前にお客さんが来ておったのに入れ違いになってしまったじゃ・・・おおっ！・・・」

車の助手席から降りてきたもう一人を認めて、アクセルは息を呑んだ。

見覚えのある少女だった。

「じっちゃん、エウレカだよ。俺の・・・ええつと・・・パートナ―の、あつ、いや、メーテルのお母さんのエウレカ。」

レントンは「俺の」の後になんと続けようかと、一瞬、戸惑ってしまったので、

こんな説明になってしまった。

「おお！」

「ああっ！」

アクセルとメーテルは二人立ち尽くして、二人とも顔に三つの”0”で三角形を作っている。

あの日、あの香りの風がアクセルの胸中に蘇る。

「あの・・・お久しぶりです。あらためまして、よろしく願います。おじいさん。」

エウレカは礼儀正しくペコリと頭を下げた。

しばらく、驚いた表情のまま固まっていたアクセルだったが、丁寧に挨拶をされてハッと我に返る。

今日は、なんて頭を下げられることの多い日だろう。

「あッ、いや。これはどうもご丁寧に。手前、アクセル・サーストンと申します。ウチの不肖の孫が、大変お世話になっております。」
アクセルは年の功を感じさせる穏やかな表情と口調で言った。

レントンは何からどう説明して良いものかとやや困惑していた。

「あのね、じつちゃん。なんと云うか・・・その・・・なんと云うべきか。」

アクセルは景気よくレントンを叱咤する。

「レントン！何をぶつくさ言っとる！はつきり『俺の嫁さんだ。』
と言わんか。バカもんめ！」

大声だったが、アクセルの瞳は笑っていた。

レントンとエウレカは、お互いに顔を見合わせて、少し照れくさそうに笑った。

「ママ？」

メーテルはお気に入りの少しくたびれたぬいぐるみをしっかりと胸に抱きしめて、エウレカをじっと見つめている。

「メーテル、おいで。」

エウレカは膝をつきメーテルの視線までしゃがむと、両手を広げた。

「ママ！！」

メーテルは母親の胸に飛び込んだ。

なつかしい髪の毛の香り、空の色、暖かさ、一生懸命にあやしてくれた澄んだ笑い声、とても不思議な色の瞳。

「メーテル、ごめんね。会いたかったよ。」

「ママ！・・・ママ！・・・ママ・・・。」

メーテルはエウレカに抱きしめられて、泣きじゃくった。
さもありなん、まだ母親に甘えたいさかりの幼児である。

まだ小さかったメーテルにとって記憶は無いに等しい。

しかし、音が、光が、香りが記憶を超える感覚を結晶化させた、一瞬に。

これを母子の愛と呼ぶのだろうか。

「いかな・・年をとるとどうも涙腺が・・、しかし、長生きも・・
・してみるもんじゃわい・・。」

アクセルはメガネを少しあげつつ感涙を拭う。

レントンがサーストン工業をつぎ、家族を守ろうと決意した瞬間
はこの時であったと、後に彼は述懐している。

レントンはやさしい風を受けて空を仰ぎみた。

その時、目に眩しい無数の光が空に舞っているのに気がついた。

「ああ！スカイフィッシュ！」

エウレカの肩越しに目ざとくみつけたメートルが、空を指差して
叫んだ。

「おお！絶景！」

アクセルも瞳をこらして空を見上げる。

レントンとエウレカも、ひとつがいの鳩のように寄り添い空を見
上げた。

空を舞うスカイフィッシュの群れは、新しい家族の門出を、いつ
までも祝福し続けた。

この一日は、この光景は、レントンにとって生涯忘れることはでき
ない思い出となるであろう。

朝の風景

レントンは夢をみた。

歓喜と高揚した気分が彼の精神を心地よく疲労させていたのだろう。眠りに落ちるのに全く苦労はしなかった。

一日の終わり、現実から夢の世界に落ちる刹那、いつも彼の頭の中をよぎる言葉。

「レントンは？わたしを、信じてくれる？」

霞んでいく最後の笑み、

「ああ、信じるよ。これでまた一日・・・近づけたって・・・」
寢言のようにそう呟くと、すうっと眠りに落ちる。いつものことだ。

レントンは夢をみた。

エウレカの夢をみるのは珍しいことじゃない。
できれば、みたくない夢だった。

いつもはその手をとることもできず、声を聞くこともかなわない。

レントンの目の前で消えてゆくエウレカの姿。

その記憶はレントンの心の中の現実と夢の狭間を大きく穿っていた。
強い悔恨と激しい焦燥感と共に目覚める。

それがよくあるいつもの朝だった。

しかし、今日は違う。いつもの夢じゃない？

エウレカを、その華奢な身体を、しっかりとその腕に抱きしめた。
たくさん話もした。レントンは今まで話したかったことを次々に語って聞かせた。

彼女は笑っていた。あの澄んだ声、しっかりとレントンの耳に残

っている。

みんなで笑った。未来を共に歩める喜びを分かち合った。

目覚めはさわやかだった。

部屋に差し込んでくる朝日に瞼をたたかれ、レントンはゆっくりと瞳を開いた。

「いい夢を・・・見たな」

それだけ呟くと、ベッドから跳ね起き、今日という散文的な一日を戦う準備にはいる。

着替え、洗面所、タオルで顔を拭きながら鏡に映った自分の左目をじっと睨み返す。

夢がどうあれ俺は信じて生きなきゃならない。

(そう、信じていればいつか必ず願いは・・・)

レントンはリビングの扉を開けた。

(・・・かなうって・・・)

トーストの焼けるかおり、タマゴを調理する音、キッチンナイフで野菜を切る音、コーヒーの湯気。ベーコンサラダとフルーツジュースの彩り。

いわゆる朝の食卓。

(・・・これは・・・!?)

テーブルでは、新聞をめくる音の向こう側からアクセルが声をかける。

「お早う、レントン。」

「オハヨー、レントン！」

メーテルはフォーク片手に口いっぱいにとーストとスランブルエッグをほお張って、口をもごもごさせている。

「あつ、おはよ・・・」

（そんな、まだ、夢の中？ まさか・・・）

レントンの胸中にかつてゾーンの中で体験した出来事が蘇る。

レントンはキッチンに立つ彼女の後ろ姿を認めた。

半袖のデニム地のシャツにアースカラーのパンツというラフなスタイル、そしてエプロンをしていた。

レントンは、しばらく、呆気にとられてその後ろ姿を見ていた。

その後ろ姿は、まるで今までそうであつたかのように、ごくあたりまえに、朝の風景に溶け込んでいた。

「あつ、おはよう。レントン」

気配に気づいたかその後ろ姿はクルリと振り返った。

「お、おはよう。エウレカ」

悲しくもレントンの予測は大きく裏切られたのだった。

夢をみたわけではなかったのである。

避けようのない現実なのである。

彼女はもはやサーストン家の一員で、これから先ずっとレントンと共に歩むのだ。

そう思うと、腹の底から笑いがにじみだしてくる。

「・・・フッフツ」

「何？その気持ち悪い笑いは？」

「あつ、いや、なんでない！」

思わず姿勢を正すレントンだった。

「レントンはタマゴはどうするボイル？スクランブル？」
エウレカはお陽さまのような笑顔で声をはずませる。

そりゃ、もちろん。

「サニーサイドアップを頼むよ」
レントンは、後ろからそつとエウレカの肩を抱いて、彼女の耳元でささやいた。

夕刻

夕刻、陽射しがオレンジ色となり低い角度でさしこんでくる頃、レントンはよくこの場所でメーテルと共に過ごす。

この場所とは、サーストン工場の敷地内の一角である。

サーストン工場は広い敷地面積を有している。

南に面した空いている土地を利用して、メーテルの遊び場が設けられていた。

風向きのせいだろうか、ここでは工場特有の鉄の匂いはしない。

簡単な遊具、滑り台付ジャングルジム、ブランコ、ベンチが設置してある。

ちよつとした公園といった趣である。

全てレントンの手作りだ。

メーテルが工場の廃材置き場で遊ぼうとするのを、危険だと感じたのがきっかけである。

工場から出る廃材を利用して、設計、加工、塗装、基礎工事、組み立て施工にいたるまで全てを自分でやった。

メーテルは思いのほか、たいそう気に入ったらしく、この場所を「こーえん」と呼び、毎日、夕方、ここで遊ぶのを日課にしている。

「レントン、こーえん、行こうよ」

レントンも暇なときはよくメーテルのお供をする。

メーテルはジャングルジムに飛びついて、滑り台遊びに夢中になっていた。

レントンはベンチに腰を下ろす。

地面にはハトが2羽降り立ち、徘徊していた。

レントンはポケットから小ぶりのジャンクフードの袋をとりだすと、

中身を一握り、少し手の中で砕いて、ハトの方へ放った。

エサに感づいた2羽は急いでレントンの方へ近づいてくる。すると、どこからともなく一羽、また一羽と舞い降りてくる。これもまたいつもの光景だった。

レントンは続いて、十数羽のハトにエサを放る。

ハトたちは喉を鳴らしながらわれ先にとエサを突く。

「こらこら、ケンカするな。まだあるよ」

夕日に映えるレントンの横顔を見つめる影があった。

白い無地の夏用のワンピースを着た少女、エウレカだった。

エウレカはレントンを捜してここへきたのだが、

しばらく立ち止まって、ハトとたわむれるレントンを見つめていた。

「父さんのぶんも、じゃあ、俺が守る」

少年はかつてそう彼女に言った。

あの時の温厚で、やさしそうな瞳を思い出す。

顔立ちは少し大人っぽくなったし、声のトーンも前より低くなった。でも、そう、あれはまぎれもなくレントンの瞳。

ちょっとだけ見たことがある、海の色。

レントンの方が先に気づき、声をかけた。

「やあ」

エウレカはベンチのほうへ歩み寄る。ちょっと照れを隠すように訊く。

「何してるの？」

「ハトと遊んでる」

レントンの返答は簡にして要を得ていた。

「え？」

「どうぞ、座れば？」

レントンはベンチを少し右によけて座りなおした。

「うん、ありがとう」

エウレカはレントンと並んで座る。

レントンはもうひとにぎりハトの方へエサを放りながら言葉を吐
なげた。

「ハトってさ、おもしろいんだよ。見てると、なんか和むんだよな。
こいつら、必ず雌雄そろって行動するんだ。かたときも離れるこ
となくね。」

「……」

「よくこうして、ハトと遊んでたのさ。いいなあ、お前らは、いつ
も一緒に。ってね」

「……」

エウレカは少しおどけた風に笑顔で訊いてみる。
「会いたかった？」

しかし、レントンの反応は意外だった。海の色は瞳は悲しみに沈
んでいた。

そして、真面目な口調で静かにこたえた。

「会いたかったよ。寂しかったさ。二度と会えないかもって、何度
も、俺……」

悲痛なまでのレントンの声

「俺……ダサイよな……君のこと信じてたはずなのに……」

信じるなんて、そんなに簡単じゃないんだよ」

「レントン……」

別れの時の記憶がレントンの心を深くえぐっていることに、エウレカは気がついた。

信じれば願いは必ずかなう。しかし、それは時として諸刃の剣。

エウレカはレントンに寄り添い、彼の肩にその小さな頭を預ける。
「わたしはどこへも行かないよ。もう二度と消えたりしないから」
エウレカはレントンにそれだけを、そっと、しかし、しっかりと伝えた。

それがエウレカの精一杯の気持ちだった。

信じれば願いは必ずかなう。

今、レントンの横に座っているのは、彼が求めて止まなかったエウレカである。

「ああ」

レントンも頬をエウレカの髪に寄せた。お陽さまの香り、これからはずっと一緒。

ひとつがいのハトのように、いつでも、いつまでも。

スミレ色の瞳が海の色をみあげる。

レントンは耳の中で激しい自分の鼓動を感じた。

エウレカに聞き取られてしまうのではなからうか。

二人の視線が絡みあい、互いのの手をとり、向き合った。

レントンはエウレカに顔を近づけ、エウレカもゆっくり瞳を閉じる。

唇をすくいとろうとした瞬間、ジッと下から見上げる視線を感じた。

「！」
「！」

先程まで、夢中で地面にお絵かきをして遊んでいたメートルが、いつの間にかそばで見えていたのである。

二人は慌てて、手を引っ込めた。エウレカは真っ赤になってうつむいている。

「いや、あ、アハハ・・・」

レントンは上を向いて、意味なく乾いた笑い声をあげていた。
「ねえ、おじいちゃんが呼んでるよ」

メートルに言われて、エウレカは、ハツとなった。

「あ、いけない！わたし、二人を呼びにきたんだった。おじいさんが夕食にビッグバーグを食べに行こうって」

「お！いいじゃん、じっちゃんのおごり、ゴチになります」
「ヤッター！」

レントンは照れを隠すようにはしゃいでみせた。メートルもジャンプして喜んでいる。

「おーい、なにやっとなるかー。行くぞー」

遠くでアクセルが叫んでいるのが見えた。

「ハーン。」

メートルは一目散にアクセルの方へ駆けていった。

「何しとっただんだ？」

「ううん、別に、レントンとママがチューしてただけだよ」

「コラー！余計なことをしゃべるなー」

「アハハッ」

あらかたエサを食べつくしたハトが一羽飛び立った。
それをきっかけにしてみんな一斉に飛び立った。

みんな、それぞれの家路へと向かうのであろう。

夕日の中の公園に、家族の笑い声が響いていた。

思い出の写真

レントンの部屋は工場事務所の反対側にあるプレハブ小屋である。昔は母屋に部屋があったのだが、色々と私物が増えてきたせいもあり、

また、多くの年頃の男子がそうであるように、完全にプライバシーを保てる空間を欲しがるせいでもある。

11歳の頃からレントンはここを根城にしている。

もとは工場の事務所だったのだが、手狭になったため別の棟を増築し、事務所はそちらに移動した。

空いたこのプレハブをレントン用に改装したのである。

造りは至ってシンプルで、平屋で扉は二つ、外に出る扉と、母屋への廊下へ通じる扉とがある。

中もまたシンプルである。

机、いす、テーブル、本棚、ロフト状になった場所にベッド。

かつては、部屋の大半をリフグズやメカのパーツ、雑誌などが所狭しと占領していた。

壁には、ホルンドの勇姿、タルホのセクシーショットのポスターなどが貼られていたが、

今ではその殆どが整理され、あるいは撤去されていた。

代わりにあるのは、机上に設けられたパソコンと、机とテーブルに散乱したノートや書物、読みかけの資料などだった。

3年という時間は短くはない。

レントンは休暇をとっては世界中を飛びまわり、エウレカを捜し求めた。

そして、ベルフォレストにいる間は、ただ手をこまねいていただけではなかった。

エウレカに少しでも近づくために、あらゆる情報を集め、自分の洞察力と想像力をフル回転させて考えた。

その作業を重ねるうちに、自分に、ある思考のスタンスが身につきはじめた。

相対的視点に立つというスタンスである。

現在、スカブコーラルに関する研究内容が少しずつ開示されつつある。

人類は歴史をもつ。コーリアンとの関わりが人類の生き方や思想の潮流にどんな影響をあたえたのか。

また、いつ、だれが、どういう意図で、コーリアンの研究を、あるいは接触をしたのか。

少なからずコーリアンと関わりを持った者として、レントンは少々興味をもっていた。

レントンは自分の父や姉のような研究者ではなかったが、歴史を検証することはできる。

エウレカが帰ってきたこともあって、しばらく作業は放置状態だったが、

部屋のそうじの途中に、手に取った読みかけの資料がきっかけになり、レントンは静かに思索にふける。

おりしも、パソコンにはエウレカが帰ってくる前の日に入手したエウレカのバイオグラフィーがある。

一世紀半にも及ぶいわゆる生体ユニットの研究、観察の概論が、今、レントンの手中にあった。

生体ユニットという表記はレントンに苦々しい思いを想起させる。軍で受けたBMSの実験、まばたきひとつせず無感情、無表情のエウレカ。

多くの研究資料は、エウレカのことを実験素材としてしかとらえていないのだ。

レントンは頭をひとつふり、気をとりなおしてパソコンの画面を読み進む。

「俺なら決してそんなことはしない」

レントンはそんな独り言を言ってみる。

父は偉大な人だった。エウレカを守ってくれた。その一点こそ何よりも大きな功績である。と、レントンは思う。

かつて、彼女からアドロックと出会った頃の話聞いたことがある。研究や実験の間だけでなく、彼女と大半の時間を過ごしてくれたそうである。

一緒に食事をしたり、基地の敷地内を散歩したり、軍施設内の理髪店に連れていってくれたとも言っていた。

そういえば、それまでどんな髪型をしてたのか？彼女に訊いたっけ。

「教えない」

って、いたずらっぽく微笑んでいた。

（まてよ。たしか、このバイオグラフィー、映像資料もあったはずだ）

「ねえ、エウレカ、教えてよ。君はどんな髪型してたんだい？」

そんな独り言をいいながら、レントンは興味をそそられつつ、マウスを操作して映像のディレクトリーにコマを進める。

「髪型がどうかしたの？」

「ワアッ！！ビックリした！」

レントンの耳元からエウレカがパソコンの画面をのぞきこんでいた。

「いきなり現れないでよ！」

「ご、ごめん。コーヒーが入ったから呼びにきたの。そしたらドアが開けっ放しになってたから・・・」

「あ、そっか。俺、そうじの途中だったんだっけ。空気換えるのにドアと窓を開けてんだ」

レントンは頭をかいた。

「何をみてるの？」

「あ、いや、なんでもない。宿題さ」

レントンは手早く画面のウィンドウを閉じる。

「レントン、なんか隠してない？私の髪型がどうか言ってたのは何？」

「あ、いや、その、ほら、今の君の髪型が俺は好きだなんて・・・別に隠し立てするほどのことではないはずだが、彼女の過去を覗き見しようとしたことに、なんとなく、やましさがともなう。

やや苦しいゴマかしだったが、エウレカは思いのほかその言葉に気をよくしたようだった。

「ホント？うれしい。私も気に入ってるの」

エウレカはセミロングの髪をかきあげてみせる。

その女性らしい仕草に、レントンは少し鼓動が高鳴るのを感じた。

エウレカは興味深げに部屋の中を見回してみる。

「懐かしいね、この部屋。このベッド一度寝たことがある」

「ああ、そうか。そうだったね。君は前にここに入ったことがあるんだっけ」

エウレカと出会った頃の思い出がレントンの胸中によみがえる。カワイイ娘だったけど、少し変わっていた。

無機的な視線で人の顔を穴があくほどみる癖のある少女だった。

今は全然ちがう。その眼差しは慈愛に満ち溢れている。
昔のことを思い出して、レントンはフツツと笑いがこみ上げてくる。

そのうち、エウレカは本棚においてある写真立てに気がついた。
かざってあるのはレントンとエウレカの写真。

夕日の空を、二人で一つロングボードに乗る。

エウレカは羽ばたき、レントンは後ろから抱きしめる。笑顔の二人。
レイアウト史上空前の売れ行きを記録した号の表紙を飾った絵である。

「この写真・・・」

「ああ、ストナーさんが記念にくれたんだ」

レントンもエウレカと並んで写真を眺めながらこたえた。

「ずっと部屋に飾っててくれたんだ」

「いや、昨日、机から出してかざったのさ。3年間これを眺めて過
ごす勇氣なんてないよ。つい、感傷的になっちまうから。」

レントンは苦笑した。

「・・・そう」

エウレカはレントンを察するように静かにそれだけこたえた。

「俺たち、空を飛んでたんだよな」

「うん、そうだね。」

トラパーが各地から失われつつある今、リフという名のスポーツ
は過去のものとなりつつある。

「でも、わたし今でもレントンと二人なら飛べそうな気がする」

「エウレカ・・・」

二人の間を濃密な粒子が満たしていく。かつて感じたことのある

感覚、「波」。

レントンの鼓動はいつそう高くなった。いい波をエッジで抱くときのあの高揚感。

レントンはエウレカの肩を抱き寄せる

「あっ・・・」

エウレカは少し驚いたようだったが、すぐにレントンに同意した。

「エウレカ」

「レントン」

二人はしばらく抱き合ったまま動かなかった。幸せだった。

「おい、レントン、自分の嫁を口説くのはかまわんが、靡くらいしめる。それから、コーヒー冷めるぞ！」

「ケーキもあるよ！」

廊下からアクセルとメーテルがひょいと顔をだす。

「！」

「！」

二人は抱き合った姿勢のままドキリとなった。

「もう、いきなり現れるなよ！」

「ガアハハハハッ。結構、結構」

年の功というべきか、アクセルほどになるとこのくらいの場面にでくわしても動揺などしないのだろう。

笑いながら、リビングへ戻って行った。

「結構、結構！」

メーテルが愉しそうに復唱しながらアクセルについて行く。

なんとなく、バツの悪い二人。

気がそがれて、波も眠ってしまったみたいである。

「レントン、一緒にコーヒー飲みにいこ」

「うん、そうだね。一緒に行こう。エウレカ」

エウレカの誘いに、せいぜい、まじめくさって応えるレントンだった。

人間とコーラリアン

部屋のそうじというのにも存外進まないものだ。

レントンはテーブルの上に散乱した本や、ベッドの上に無造作に投げ込まれた衣類を、

とりあえずひとまとめにしてみる。

「整理、整頓ができんやつに、一流のメカニックにはなれん！つてか」

アクセルの口癖を唱えてみる。

「整理とは、必要なものと、不要なものを分けること。」

「整頓とは、あるべきモノを、あるべき所に戻すこと。」

多少、不統一性をみせながらも、レントンの部屋はエントロピーの低い状態に保たれつつあった。

「雑誌って定期購読するとたまるんだよねあ」

読まなくなった雑誌の束を、廃品回収の日まで、とりあえず収納に放り込んでおこうと思い、押入れの戸を開ける。

「ん？」

奥のほうに赤色の小ぶりのカゴが目についた。

中には雑誌レイアウトや写真の簡易アルバムが数冊無造作に放り込まれていた。

全てゲッコーストにおけるレントンの旅の思い出の品々である。レントンはそのカゴをテーブルまでひっぱり出してみる。

「しばらくほったらかしだったな。整理、保存しなきゃと思ってただけど・・・」

今まで、振り返る勇気がなかったのだ。

レントンにとってゲッコーステートの思い出は、そのままエウレカの思い出でもある。

忘れようとしていたわけではない、決して。

ストナー曰く、

「記憶とはそれ単体で存在するのでは無く、それをとりまく環境に大きく依存している」

ゲッコーステートの勇者達とリフの思い出、すべてがレントンにエウレカを思い出させるのだ。

どんなに愉しかった思い出でも、あんな結末が待ち構えているのかと思うと、思い出すのが痛かった。

アドロックを失った後、心を閉ざしてしまったエウレカの気持ちがよくわかる。

悲しみを着こなし、全てを受容して生きていくには、彼は若すぎた。

レントンはテーブルの上のカゴを目の前にしてしばらくそれを眺めていた。

静寂という名の音がレントンの部屋に流れていた。

本棚の写真たてに目をやる。先日、やっと部屋にかざったエウレカとの思い出の一枚。

「エウレカ、笑ってる」

フツツと写真にはほほ笑んで、カゴの中の簡易アルバムを取り出した。

ほとんどの写真がストナーによるものだ。

フレームもピンもバッチリ決まってるし何よりいい絵が多い。

ニルヴァーシユのコックピットに座るエウレカ。

振り向くエウレカに、斜め後方から工具を持ってなにやら訊いてい

る風なレントンの絵。

レントンはなんとなくこの写真が気に入って取り出してみる。

「ライダーとメカニック。」

題名を付けるならそんな感じかな。

エウレカは最高のパートナーだった。

最初は、そう、こんな感じだったな。スマイレ色の瞳、陽に透かすと不思議な色合いを放つ空の色の髪。クールで綺麗で最高にいかしてる。

彼女を追い掛け回し、彼女の気を引くことばかりに夢中になっていた。

彼女の前で赤面してまうような失敗もよくやらかした。

「ドジだったからなあ、俺」

レントンは思わず苦笑する。

「わたしは、ニルヴァーシュとホランド以外に信じられるものがないかった」

彼女がSOFに所属していたという事実はレントンを驚愕させるには十分だった。

しかし、ほんの少し洞察力と想像力を働かせればその程度ことは伺いしれたのではなからうか？

LFOを自在にこなし、波を読む力を持ち、戦闘においては抜群の手腕を発揮する。

こんな少女が俺と同じように学校へ行き、宿題に頭を悩ませ、趣味に興じ、友達をつくり、保護者から小遣いをせびり、おしゃれをして、

そんなごく一般的な生活を送っていたわけがないのである。

「我ながら……。なんとも、おめでたいヤツだったなあ」

彼女はカワイイ。レントンをドキドキさせる。その事実完全に目を奪われ、もう一方の事実の方に想いを致すことができなかった。だが、それらの事実すら凌駕する彼女の真実。

こればかりはもはや洞察力や想像力の守備範囲ではない。しいて言えば空想力か。

「フツ、確かに人間ばなれしてはいるけどね。あのかわいらしさはスカブコーラルが人型コーリアンの造形主であるのだろうが、スカブコーラルもずいぶんと研究をかさねたんだろうな。」

レントンはこの冗談と真摯さとの両方をかねそなえた命題について考え、また苦笑する。

スカブコーラルは不思議に思っていたのかもしれない。人間の若い男女が一目で惹かれあい恋におちるさまを。

言葉なくして無条件に相手を信じさせるこの作用を、あるいは、有効だと思ったのかもしれない。

「ライダーとメカニック」

「少年と少女」

「人間とコーリアン」

ふたりは対、最高のパートナー。

二人は違う。同じではない。全てを受け入れるということは、同じであると思ひ込むことではない。

受け入れるということは、違うということを理解すること。そう、二人はそれぞれ違うのだ。

すべてを分かり合うなんてできっこない。だからこそ時間をかけ

てわかりあいたい。

レントンは心からそう思う。

レントンは椅子の背にもたれてもう一度その写真を仰いでみる。
（違う二人がそれぞれちがう役割を担って生きていく、一つになつて・・・）

部屋をながれて行く静寂の中に女の子の笑い声が溶け込んでくる。
外からだ。

レントンは開いた窓際に近づいてみる。外は午前11時の陽射しが草木や土やアスファルの素材の水分を活性化させさわやかな香りでみちあふれていた。

レントンは眩しさに瞳を凝らす。

庭ではエウレカとメーテルが洗濯物を干していた。

「メーテルは靴下をほして、そう、洗濯ばさみのところ」
「はい」

エウレカは洗い立てのシーツを干し竿にかけようとする。真っ白なそれを一杯にひろげてバサツと風になびかせる。

まるでウェディングドレスのような風情がある。

風が洗い立ての清涼感あふれる香りをレントンのところまで運ぶ。

「レントン」

「レントン」

二人ともレントンに気づき笑顔で手を振っている。

レントンも軽く手を振ってそれに応えた。

エウレカは俺を信じてくれた。帰ってきてくれた。
今度は俺が応える番だ。

エウレカが笑っている。

（エウレカが愛おしい。何があっても守り抜きたい）

レントンは心からそう思う。

新しい日々

過ぎ去り、そして、その後にやって来るのが未来というものである。

「新しい生活はお買い物から」

消費者の購買意欲を促す目的の家電製品の小売店のキャッチコピーが、

あながち間違いではないなとレントンは笑ってみる。

なにはともあれ、家族が一人増えたのだ。

毎日を暮らすにあたって考えなくてはならない必要なファクターというものが増える。

足りないものは買い揃えなくてはならない。

エウレカの衣料品をはじめとして、生活必需品がやや不足していた。

いままでエウレカの被服はダイアンのお下がりでしのいでいたのだが、サイズがいまひとつ合わないし、何よりデザインが古い。

ベルフォレストはこれから一年で最も良い季節を迎える。

季節の変わり目ということもあり、レントン、メーテルの今シーズンの普段着の購入も兼ねて、週末にエウレカのお買い物に出ることにした。

レントンはアクセルも誘ってみたのだが、

「せっかくの週末じゃ、子守は御免じゃよ。たまには親子水入らずで楽しんできたらどうじゃ？」

本心か、あるいは気を利かせてくれたのか、おそらくその両方だろう。

しかし、この「親子」という言葉にレントンは少々戸惑いを憶える。

決していやなわけではない。

エウレカを『自分の妻』と、メーテルを『自分の娘』と、堂々と呼べればこれほど光栄なことはない。

（果たして、俺にその資格があるのだろうか？）

彼はまだやつと少年期を脱したばかりの若者である。

レントンが将来進んで行く道にそれがあっても、今ひとつ確固としたイメージがわからない。

無理もないことではあるだろう。

「勝ち取ったら、勝ち取ったで、いろいろ悩みも増えるみたいだよ、父さん」

贅沢な悩みがレントンの口をつく。

居間に飾ってあるアドロックの写真は、その人となりを示すような人懐っこい笑顔をみせていた。

お買い物へ

「わぁ〜い、お買い物、お買い物、マ〜マと一緒にうれしいな♪」
四駆ランドカーの後席ではメートルが自作自演の歌ではしゃいでいた。

「なーに？その歌は」

サイドシートにエウレカ。

「おーい、メートル。ちゃんと座ってるよ」

レントンはランドカーを運転する。

レントンはメートルをたしなめてはみたものの、歌いたい気分なのは同じだった。

ゲッコーステート時代はよくタルホやヒルダに買出しを付き合わされた。

エウレカともよく一緒に買出しにいった。

なんかとっても懐かしくて、軽やかな気分だ。

どうやってエウレカに近づこうかって、そんなことばかり考えていた。

買出しで、初めて彼女と二人きりになれた時のモノローグが頭をよぎる。

「もしかして？これって、初デートっすか？」

「何？」

エウレカが訊く。

いけない、つい音声化してしまっていた。

「あ、いや、ちょっとね、昔のことを思い出したもんで・・・」

レントンは照れ隠しに運転用のサングラスをかけなおしてみる。

外はいわゆる「お仕事をするにはもったいない良い天気」だ。

午前中のおふれる光は全て自然物、人工物の色合いを鮮やかにする。

「そういえば、昔はよくみんなで買出しにいったよね。愉しかった」
エウレカは昔を懐かしんで言う。

「ああ、そうだね。愉しかった。買出しでも、そうじでも、料理でも、エウレカと一緒にできることならなんでも！」

レントンは続けた。

「リフでも、ニルヴァーシュでも、戦・・・」
ハツとしてレントンは口をつぐんだ。

思わず「戦闘でも」と言いそうになってしまったのだ。

そうだった。ゲッコーステートというのは国家権力に対して戦争をしていた集団だった。

だが、こんな愉しい雰囲気には水を差すのは愚というものだろう。

「セン？」

エウレカが怪訝そうな顔をする。

「戦・・・セン・・・、洗濯でも、アハハハ・・・」

「ネ！レントン！ソフトクリームおごつてね！」

都合よくメートルが流れを切ってくれた。

曾祖父の躰が厳しく、普段甘いものをあまり許されていないメートルにとって、こういう時がとても楽しみなのである。

「よおおおし！みんなでソフトクリーム食べような、な！な！な！？」

レントンは寸前のところで、波をとり戻しおどけてみせる。

「うん！」

「ウン！」

メーテルとエウレカが応える。

スミレ色の瞳、少女の笑みもあの頃のままに。

ショッピングモール

レントンたちの車はベルフォレストの中心街タワー地区に向かって走っていた。

ベルフォレストをはじめとする多くのタワーシティは、塔^{タワー}を中心とした放射状の街となっている。

郊外から道一本で繋がっている。

ここはもとも大きなシティではない。

レントンの住んでいる地区からでも車で15分ほど飛ばせば中心街までこれる。

車窓の風景が自然を多く含んだものから、人工建造物を多く含んだものへと変わりはじめる辺りまでくると、車の交通量も増えはじめる。

田舎町とはいえ経済の中心地区はやはり混みあう。

レントンの目指すのはタワー地区にあるベルフォレスト唯一の巨大なショッピングモールだった。

「あ！見えてきた！」

メーテルが後席からショッピングモールの最上階の大きな看板を指差して言った。

タワーシティの中心にあるタワーは、都市機能の管理を司る。

交通、エネルギー、防災、治安、すべてがここに一極集中している。かつて、タワー地区に巨大なトラパー発電のエネルギープラントがあったのだが、

トラパーがこの地上から失われつつある現在では不要のものであった。

自然エネルギー、化石燃料などによる代替エネルギーによるシステムが急ピッチで進められる一方で、

この不要になったエネルギープラントの撤去とその広大な跡地の有効利用が行なわれた。

ベルフォレスト州議会は「タワー地区都市再開発法」なる法律を通し、予算を組み、

公団を立ち上げ、この広大な跡地の利用を委ねた。

と、いうより最初から概ねの方針は決まっていたのである。

巨大ショッピングモールを誘致して街の経済の活性化に役立てようという案であった。

ショッピングモールとはいっても買い物だけではない、映画館、食事、室内遊戯私設を兼ね備えた一大娯楽施設である。

その再開発の核となる企業、世界的にも知名度とノウハウを有する「セブン・フォールディングス」に誘致の白羽の矢が立った。

誘致、建設に関しては政治家者、役人どもが必死に暗躍したのはまず間違いないところだが、それはまた別の話である。

今後この計画はベルフォレストの財政とともに、彼らの懐も潤すことであろう。

結構な話である。と、レントンは皮肉な笑みをうかべる。

腹黒い人々の意図とは関係なく、施設としてはすばらしいものだった。

レントンたちの車は広大な駐車スペースを有する建造物内に滑り込んでゆく。

今日は、週末を家族と過ごすそうと訪れる者たちで賑わっていた。

到着したレントンたちは紳士服、婦人服、子供服の販売エリアに足を運ぶ。

どこの販売ブースのディスプレイも、これから暑くなっていくシーズンにふさわしい、さわやかな色合いのセッティングがなされていた。

エウレカは愉しそうだった。

ゲッコーステイト時代は、買出しの時はいろいろと気を使わなくてはならなかった。

彼らはいわゆるお尋ね者なので、街に出るときはゲッコーステイトを気取られることのないように注意を払う必要があった。時には変装したり、見張りを立てたりすることもあった。

でも、今日はそんな心配はしなくても良い。

エウレカは大好きなレントンとメーテルと一緒に自由な時間を満喫して良いので、心が軽い。

「わぁー！かわいい！」

メーテルが流行りのキッズ・ブランドのブースに駆けてゆく。

最近では、おしゃまな彼女は着るものも選りを好みだした。

メーテルは淡色系の白やピンクを基調にして、フリルなどを使ったり、いわゆる女の子っぽいのが好みようだ。

キャラクターものも好きらしく、いつちよまえに鏡の前でお気に入りに候補の服を胸に当ててみたりしている。

最終選考に残った二着に大いに迷っているようだった。

「ねー！ママ、レントン、どっちがいいかな？」

レントンとエウレカは顔を見合わせて「フッフ」と微笑んだ。

エウレカのワンピース

（どんなデザインが好み？）

（どんな色が好み？）

（レントンはどんな私が好きなんだろう？）

好きな人のために綺麗でありたいという想いは、古来からの女性の切なる願いである。

（基本はやっぱりワンピースかな？）

（色は・・・？）

「ねえ、レントン。どんな色が似合うと思う？」

婦人服のエリアは華やかでレントンは少し居心地の悪さを憶える。

「エウレカは綺麗だから、なんでも似合うと思うよ」

「それじゃダメ！レントンはどんな私を見たい？」

エウレカが生氣に満ちたスマイル色の瞳をレントンに向ける。
少し眩しい。

「そうだな……。やっぱり青かな？。君の髪の色によく合う」

陽射しに透かすとても不思議な色合いを発する空色の髪。
まるで、きめの細かいトラパー粒子のような。

「そう!？」

「んー、そうだね。こんな感じなんていいんじゃないかな？」

レントンの選んだのは白と淡いブルーの色合いのプリント柄ワンピース。

たゆたう水面を彷彿とさせるような柄だ。

「待つてて！試着してみるね！」

エウレカは声ははずませて、それを受け取り、試着室へ。

試着室の前で待つレントンとメートル。

衣擦れの音がして、エウレカの着衣がエウレカの足元へ落ちるのがドアの下の際間から見える。

レントンはかなりドギマギしてしまう。

（ちょっと・・・いかな・・・イカン、イカン。六根清浄、色即是空、空即是色）

「ねえ、レントン、何ぶつぶつ言ってるの？」

メートルが見上げている。

「エッ！あつ、いや、何でもないよ！」

「どーせ、またエッチなことでも考えてたんだよね！」

「考えてま・せ・ん！」

「もー、レントンはママが帰ってきてから、途端にエッチになるんだから」

「若いんだからある程度は仕方がないだろうが」

「あー、恥じてない！開き直るつもりなんだ」

「ち・が・うー！もー、未就学児童のくせにどこでいろんな言い回しを憶えてくるんだか・・・」

レントンとメートルが舌戦を繰り広げていると、試着室の扉が開いた。

「どう・・・かな？」

エウレカは新しい姿を披露する。

「！」

レントンは絶句する。風が・・・、波が・・・、いや、辺りの空気が変わった、一瞬にして。

風の香りがする。暖かい陽射しの溶け込んだ、それでいて涼しい風。とても優しい気持ちになれる風。

まるで、おとぎ話の妖精のようだ。

ワンピース姿のエウレカ、その色合いはエウレカのやさしさ、はかなげな可憐さを遺憾なく引き出していた。

そして、その風に僅かに溶け込む官能的な甘く危険な香り、むき出しの肩がレントンを平静ではいられなくする。

「・・・変・・・かな？」

「そんなことない！綺麗だよ！とっても！」

「ホント！？」

「ホントだよ！すごいいい！」

「うれしい！」

エウレカは小躍りしてレントンの腕に寄り添う。

エウレカの裸の肩がレントンの肩に触れる。これは・・・キツイ・。
。。

「ママ、キレイだね！」

メートルが素直な感想を述べる。

「ありがとう、メートル」

エウレカはメートルの頭にそつと触れる。

レントンは店員に会計を頼む。

「このままお召しになれますか？」

店員の問いにエウレカは頷いた。

「あのね、ママ、レントンったらさっきからママのことをエッチな目で……うぐっ……」

「？」

レントンは慌ててメートルの口を塞ぎ抱きかかえて、

「よおし！次は遊びに行こうよな、メートル。ここには大きなゲームセンターが併設されてるんだよ。アハハハ」

「ウン！」

レントンとエウレカはメートルを真ん中に3人で手を繋いで歩き始めた。

童心に返って

「ママ！レントーン！はやくー」

メーテルは色彩豊かなフロアーをご機嫌で駆けてゆく。
数々の室内乗用アトラクションとハイテクコンピュータゲーム、
クレイゲーム、メダル用ゲームなどのコーナー。

「走るなよ。転ぶぞー」

週末で賑わう室内遊戯施設。親子連れ、若いカップル、男女のグループ。

他人からみれば自分たちはやっぱり親子連れに見えるのだろうか？
それとも少し年の離れた兄妹くらいかな？

エウレカはやさしい眼差しでメーテルを見守る。

最近よく見かけるエウレカの慈愛にみちた仕草。

（エウレカは本当に母親なんだな）
とレントンは思う。

「レントーン、こっちに新しいアトラクションが入ってるよ！」

場内をマウスのように走りまわるメーテルは目聡くお目当てを見つけたようだ。

「行こう、レントン。」

エウレカがレントンの手をとる。

「うん」

レントンもしっかりとエウレカの手を握りかえす。

レントン、エウレカ、メーテルは童心にかえって遊んだ。

ホラーアドベンチャーもの3Dバーチャルリアリティ室内乗用アトラクションは、最近新しく作られたものだった。

迫力満点でメーテルは大はしゃぎだった。

発掘現場の事故調査に訪れた調査チームが、トラパーの異常現象と遭遇し、抗体コーリアンの群から逃げ惑うというなかなか凝った趣向のストーリーだが、レントンは楽しみつつも苦笑せざるおえない。

これが今だに人々に浸透しているコーリアンのイメージなのかと思う。

レントンはエウレカの心中を察して、心がチクリと痛んだ。

そつとエウレカの方を伺ってみると、エウレカは意に介する風でもなくメーテルと一緒に笑っていた。

（よかった）

レントンはホツとする思いだった。

クレインゲームコーナーでは、レントンはメーテルにうさぎのぬいぐるみをせがまれた。

小型の走行ロボットハンドで景品を持ち上げて取り出し口まで運ぶという至極単純なゲームだがなかなか奥が深い。

いずれハンドにはなんらかの仕掛けが施してあるのだろうが景品をゲットするのはなかなか至難である。

「ネエ、レントン、あれ！、うさぎさんのバックパック」

「まかせろ！」

レントンは目視力と手の感応力、マンマシンインターフェイスには絶対の自信がある。

祖父譲りの職人的センスは自他共に認めるシビアさである。

2回のトライを失敗したが、これで完全にこのマシンのクセと感応を手の内にいれた。

そして、3回目。につくきうさぎのぬいぐるみを見事に吊り上げ、景品口に叩きこんだ。

「ヤッター、スッゴイ！」

「凄いね！レントン」

エウレカは本気で感心している。レントンを頼もしげに見つめていた。

「いやあ、そんなあ、それほどのこともあるんだけどね。なーんてレントンはおどけてみせる。

「なーに、言ってるのよ」

「やーだ」

メーテルはうさぎのぬいぐるみを抱きしめて笑う。

エウレカもレントンも笑顔で応えた。

童心に返って その2

「ね！レントン、次はあれやろうよ！」

「あれかー？ でも、あれはお前にはまだ無理だよ」

メーテルの指差すあれとは、今ゲームファンに絶大な人気のあるハイテクコンピュータゲーム機「L・F・O デュアルファイターズ」である。

LFOを駆使し、波を読んで空中戦を繰り広げるといふ対戦型体感3Dマシン。

その疾走感、爽快感が受けて今や大抵どこのゲームセンターでも目玉である。

驚くべきなのは、操縦席のレイアウトだけでなく、その機能や操縦感をも実機に忠実に再現してあることだった。

「ねー、ママー」

メーテルは今度はエウレカに頼んでみる。

「わかった。ママと一緒にやってあげる」

「やったー、ママと一緒に！」

エウレカはレントンに訊く。

「このゲーム、レントンは知ってるの？教えて、どうやるの？」

「ああ・・・俺もそんなに詳しくはないのさ。基本的に標準型ターミナスと操縦は全く同じだよ。

あ、そうだ！対戦型だから、どう？俺と一戦交えてみる？俺を倒せたら昼メシをご馳走するよ」

「うん！いいよ」

エウレカは、スミレ色の瞳を輝かせて頷いた。

「よし！レントンなんかやつつけちゃおう」

「はっはは、手加減はしないぜ！メーテル」

レントンは余裕の表情である。

エウレカはメーテルを膝にのせて一緒に操縦桿をとる。

レントンも対抗機のシートに着いてコインをインサート、ゲームをスタートさせた。

数分後、木っ端微塵に自信を打ち砕かれたのはレントンのほうだった。

7戦0勝7敗……。

「ママー！やつちゃえー！レントン、よわーい」

「えーい、くっそー、これならどうだ！」

レントン得意のスライダーショットも難なくエウレカに読まれ痛撃を食らう。

レントンは8回目の被撃墜で一矢を報いるのは不可能と悟った。

「無謀だったか。以前のこととはいえエウレカは天才LF0ライダーだったんだよな。忘れていたわけじゃなかったんだが……」

「十年早い！っていうのかな。こういうとき」

エウレカは普通の少女と変わらない屈託のない笑顔でそう言った。

「まったく容赦ないんだから……少しは手加減してくれても……」
「ごめん。レントン。傷ついた？」

「ゼーゼン！」

レントンはわざとらしく怒ったフリをして、おどけてみせた。
レントンはなんだか嬉しかった。エウレカが全力で自分にぶつか
って来てくれることがとても嬉しかった。

二人は顔を見合わせてプツと吹き出した。

「一緒に行こう！」

「レントン！あれ見て！」

メーテルが人だかりの方を指差す。

場内の特設会場の一角が異常な盛り上がりを見せていた。
このショッピングモールの主催で

「L・F・O デュアルファイターズ大会」なるイベントが催されているだ。

「コンビネーションシステム！入賞者には豪華景品多数！エントリー受付中！」

コンビネーションシステムとはパイロットとナビが二人一組となつて対戦するシステムである。

パイロットは機の操縦と武器の操作を、ナビは波の算出と火器管制を受け持つ。

実機さながら、二人の呼吸が勝負の分かれ目となる。

「ほーお」

「ふーん」

レントンとエウレカは大会宣伝用の横断幕を見上げながら、半ば感心したように、半ば関心をしめすように声をだした。

そして、しばらく間をおき二人は同時に見つめあう。

「フッ」

「フフッ」

「一緒に行こう！」

「一緒に行こう！」

「エウレカ！」

「レントン！」

ショッピングモール内のレストスペース。

カウンターにはハンバーガー、ヌードル、ドリンクをはじめ、さまざまなファストフード・シヨップが立ち並ぶ。

お昼時でもあり客で賑わってはいるものの、

店員の手際良さと、豊富なスペースと席数のおかげでさほど混み合っている印象はなかった。

レントンとエウレカとメーテルは窓際の席で昼食を楽しんでいた。メーテルはご機嫌でソフトクリームを満喫している。

「エウレカもなにかデザートいる？あ、甘いもの苦手だったけ？」
昔のことだが、レントンは思い出した。

「ううん、そんなことないよ。どうして？」
エウレカは意外そうな顔して聞く。

「あれ？ホランドからそう聞いたんだけどな」
「そう、ホランドから・・・」

「それならさー」

レントンは売店のカウンターの方をみまわして言う。

「回転焼きなんかもあるよ。一緒に食べてみない？」

エウレカは露骨にいやそうな顔をする。

「私は甘いものが苦手なんじゃないの。あんこが嫌いなだけ」

「・・・ああ、はいはい、納得」

ホランドめ、よくもえらそうに知ったかぶって、なにが「よくおぼえとけ」だ。全然ちがうじゃないか。

エウレカはテーブルに左手薬指の指輪を嬉しそうに眺めている。シャープでシンプルなデザインのシルバーのファッショニングである。

レントンが選んでくれた。

「凄かったね、ママ！」

メーテルが口元にいっぱいクリームをつけて言う。

「ほらほら」

エウレカがそれをハンカチで拭ってあげながら

「うっん、レントンのナビゲートが凄かったから」

「いやあ、そんなことないよ。」

エウレカに誉められてレントンはまんざらでもない。

「L・F・O」のゲーム大会にエントリーした二人は、はた迷惑な強さを発揮した。

大会としては結構大きいものらしく、地域の腕自慢たちが集まっ

ていた。

ゲームファンのみならず、元LF0乗りの軍出身者、元リフボ―ダ。

エウレカとレントンはそんな強敵たちをバツバツとなぎ倒しにしていた。

エウレカの操縦テクニックと戦闘センスは言うに及ばず、レントンの波の算出スピードも尋常ではなかった。

そして、なによりも二人のピッタリとあった呼吸。これもゲッコーステートの旅で得た宝である。

若いカップルの躍進は会場をどよめかせた。

「何者だ？あいつら」

「レントン・サーストン？エウレカ？・・・どっかで聞いたよーな」

「まさか、あの二人、・・・ゲッコーステート」

「何だつて！？なんでそんなとんでもない連中が！？」

「スゲー、とてもかなわねえ。これがゲッコーステートのマヌーバーか」

レントンとエウレカはトーナメント戦を勝ち進み、ついにはその頂点にまで二人で登り詰めたのであった。

優勝の賞品はいろいろと選べるようになっていたので、ショッピングモール内の某有名貴金属品店提供のグッズをもらいうけることにした。

レントンはエウレカに指輪をプレゼントしたかった。

シャープでクールでシンプルなデザインのシルバーリング、エウレカにぴったり。

店員に刻印を頼む。” R t o E ”

レントンは思い切ったように、少し乱暴にエウレカの左手をとる。そして、薬指に指輪を押し込んだ、少しだけ強引に。

誰にもわたすものかというレントンの気概である。

「ありがとう。レントン」

「ああ、似合ってるよ」

「ニアッテルよ」

またしても、メーテルが顔の下半分クリームだらけにしている。

「ほらほら」

「ほらほら」

メーテルの顔を拭く二人であった。

終章

ショッピングモールからの帰り、メートルのリクエストに応じて「希望が丘公園」に立ち寄る。

郊外の丘陵地を利用した広大な自然公園だ。

メートルはここでもうひと遊び。

陽も傾き、辺りがオレンジ色の色合いを帯びてくると、さすがにメートルも遊び疲れたようだ。

レントンの背中におわれて眠ってしまった。

レントンたちは駐車場に戻り、車の後席にメートルを寝かせる。

「さて・・・と、帰ろうか？」

エウレカは後席で眠るメートルを優しいまなざしで見つめていた。

「どうしたの？エウレカ」

「メートル、笑ってる。どんな夢をみてるのかな？」

「ああ、そうだね」

レントンはエウレカが少し目元を拭ったのに気がついた。涙？

「エウレカ・・・、泣いてるの？」

「ううん、なんでもない」

照れを隠すようにエウレカが左手をかざして笑顔で言う。

「今日はありがとう。指輪、とってもうれしかった」

「ああ」

レントンも笑顔で応えた。

わずかな沈黙のあとエウレカは呼吸を整えてから声をだした。

「会いたかったの・・・、私も。こんな風にレントンとメートルと・・・。」

帰らなきゃって思ったの・・・レントンとメートルのところへ。レントンがいてくれたから、信じてくれたから私は・・・。」

帰ってこれたの、という一声を絞り出そうとしが、涙があふれた。

「エウレカ・・・」

レントンはエウレカをそっと抱き寄せる。頬に手を触れる。

二人は見つめあい、そして、目を閉じた。

唇を重ねる刹那、レントンは昔マシユーに聞いた言葉を思い出した。

「女の子の泣ってのは、砂糖菓子を溶かしたみたいにきれいなんだぜ」

夕陽の車内、2つのシルエットが重なる。初めての口づけ。

レントンはエウレカをしっかりと抱きしめて自分の意思を言葉にのせる。毅然として、

「結婚しよう、エウレカ。いつまでも一緒にいよう。死が二人をわかつまで、いや、死が二人をわかつとも」

「うん」

エウレカはレントンの肩に頬を寄せたままコクリとうなずいた。

「マ〜マー？ここどこ〜？」

メートルがいつの間にか起きだして寝ばけまなこで目元をこすりあくびしながら前席を伺っている。

二人は慌ててお互いから手をひいた。

「よーし、それじゃ、帰ろうか！」

「うん、帰ろう。わたしたちのウチへ！」

「うん、おじいちゃんがまってるよ」

レントンはイグニッションキーを廻した。サングラスはかけない。エウレカに自分の思いを伝え、自分が選びとった未来。

この夕陽の色をしっかりと自分の目に焼き付けておきたかった。

レントン、エウレカ、メーテルは家路へと向かう。

生涯忘れえぬ夕陽の中を。

（おわり）

終章（後書き）

ながらく、駄文駄作にお付き合い頂きまして、誠にありがとうございました。

「小説家になろう」初投稿にも関わらず、たくさんの方に読んでいただき、身に余る評価やコメントまでいただきまして、大変うれしく思っております。

いずれまたレントンとエウレカのお話を書いてみようと思います。

ひとまず、これにて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7222g/>

（小説版）交響詩篇エウレカセブン その後

2010年10月10日09時13分発行